

Untitled (The Museum Elements #61), 2022 © Gottingham Image courtesy of Chiba City Museum of Art and Studio Xxingham



上: 田中一村《楮図屏風》1931年 千葉市美術館蔵 ©2022 Hiroshi Niiyama
下: 恩地孝四郎《白垂(蘇州所見)》1940年 千葉市美術館蔵

館長のつれづれコレクション案内 建築家大谷幸夫が 千葉の人々への敬意を込めた千葉市美術館



千葉市美術館
設計: 大谷幸夫+大谷幸夫研究室

地下3階、地上12階
高さ: 59.99m
建築面積: 1859.67㎡
地上: 鉄骨造
地下: 鉄骨・鉄筋コンクリート造

美術館の建物をコレクションのひとつと言われると違和感を持つ方もいらっしゃるかもしれませんが、以下に述べますように、千葉市美術館の建物は日本近代建築史の中でも重要な位置にあり、千葉にとっても特別な意味を持ち、コレクションに数えるにふさわしい作品です。この建物は、旧川崎銀行千葉支店の建物を新たな建築が包み込んでいること、そしてそのファサード（正面）と調和する外観および細部のデザインを特色としています。1960年代以降の高度成長期、都市開発の中で文化財保護と現代生活をどのように両立させるかが建築界および関連分野では大きな問題でした。千葉市美術館の建築はそれをみごとにしとげた例と言えます。千葉市に長くお住まいの方は、90年まで中央地区市民センターとして用いられていた旧川崎銀行の建物が、曳家され、美術館1階にあるさや堂ホールになったことをご存じのことでしょう。

明治時代以降、軍都として栄えた千葉市は、第二次世界大戦の戦火で焼け野原となりました。戦前から残った建物は3件のみであったとされ、その貴重な建物のひとつが本町の旧川崎銀行でした。同行は茨城県出身の実業家川崎八右衛門（1835

-1907）の創立になり、東京に本店を、水戸、佐原、佐倉、千葉に支店を置いていました。千葉支店は1874（明治7）年には現在地にあり、関東大震災で被災して、1927（昭和2）年に再建されました。設計者は工手学校で辰野金吾らに建築を学んだ後、ドイツに留学した矢部又吉（1888-1941）。矢部は川崎銀行関係の建築を多く手掛けており、佐倉支店は現在、佐倉市立美術館のエントランスとなっています。

1992年に千葉市が政令指定都市になるにあたり、中央区役所と美術館の複合施設が建てられることとなり、その設計を東京大学定年後、1984年から89年まで千葉大学建築学科で教鞭を取った大谷幸夫（1924-2013）が担うことになりました。大谷は、東京生まれ、戦中に、東京大学で建築を学びます。丹下健三に師事して、戦後復興のなかで、丹下が手掛けた広島原爆記念館の建築に参加。自らも京都国際会議場（1966年竣工）など多くの建築を手がけます。一方、70年代以降の日本の都市開発について大谷は、「現代の都市では、歴史を担った建物を取り壊し、したがってその建物に拠って時代を生きてきた人びとの記憶をかき消して、「現

代」を実現している。つまり歴史の再認識の手がかりを都市から消し去るだけではなく、現代は歴史の無残な死と、それが無意味であることを宣告しているかのようだ。私は、生きてゆくときに求められる謙虚さの欠落と、癒しの心から一番遠い世界を感じる」としているように、長らく古い建物の保存と都市化の両立を探っていました*。

旧川崎銀行千葉支店を調査した大谷は、昭和初期の日本の洋風建築の水準を示すものであると評価し、建物保存を求める市民運動なども踏まえ、この建物を残しつつ、新区庁舎と美術館の機能を満たす建物の工法に、日本の伝統工法である鞘堂方式を採用します。

千葉市美術館は千葉にゆかりのある建築家が、千葉の歴史を思い、戦後復興を支えてきたこの地の人々への敬意をこめて設計したものです。エレベーターホールの壁などの花のレリーフは大賀蓮など千葉ゆかりの花。訪れる人々へのおもてなしの気持ちを表していると大谷が語っています。美術館の建物は細部まで心の行きといた作品でもあるのです。

*「八月の空に寄せて」『爆』26号 1995年

とある美術館の夏休み

参加アーティスト&出品作品紹介

7月16日から始まる「とある美術館の夏休み」展では、現代美術家と千葉市美術館の所蔵作品がコラボレーションし、「夏休み」というちょっと特別な時間を美術館のなかにつくりあげます。今回は、展覧会の3つのテーマごとに、参加アーティストと出品作品をご紹介します。千葉市美術館でささやかな休暇をお楽しみください!

※印がついている画像については、展示イメージとなります。

美術館をときほぐす

中崎透

現代美術家



中崎透《色眼鏡でみる風景》MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館、2020年 撮影:都甲ユウタ ※

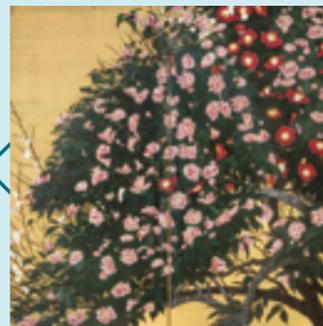
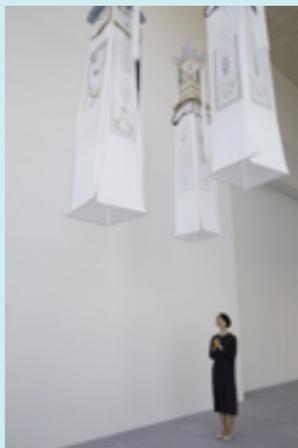


多々羅義雄《房州布良ヲ写ス》1922年頃 千葉市美術館蔵

——ここ数年、よく試みている作品形式で、その場所や地域に所縁のある方たちにインタビューをして、その言葉の中から引用したテキストと、その建物や場所に残っていたものや、自作のライトボックス作品などを交えてインスタレーションを組み、土地にまつわる物語を浮かび上がらせるような劇場型の作品シリーズを制作している。今回は美術館の学芸員の方からお話を聞いて、コレクション作品や什器などを交えながらの新作を考えている。

ミヤケマイ

現代美術家



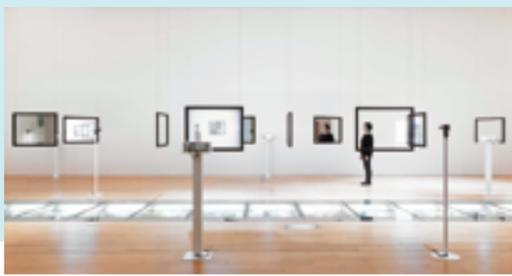
田中一村《楳図屏風》1931年 千葉市美術館蔵 ©2022 Hiroshi Niiyama

ミヤケマイ《大分観光壁「世界は届けい・セカイハトドケイ 大分の中心で家内安全を叫ぶ」》大分県立美術館、2015年 撮影:繁田諭 ※

媒体を問わない表現方法を用いて骨董・工芸・現代美術・デザイン、文芸など既存の区分を飛び越え、サイトスペシフィックなインタレーションを展開。

津田道子

現代美術家



津田道子《あなたは、翌日に会いにそこに戻ってくるでしょう。》NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)、2016年 Courtesy of TARO NASU 撮影:山本紉 ※

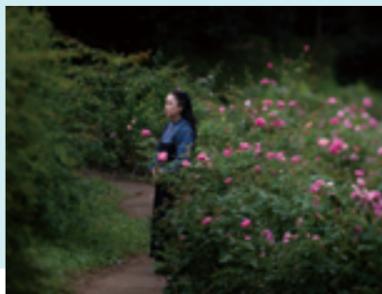


恩地孝四郎《白亜(蘇州所見)》1940年 千葉市美術館蔵

インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多様な形態で、鑑賞者の視線と動作によって不可視の存在を示唆する作品を制作。

清水裕貴

写真家・作家



清水裕貴《あなたはここにいない》2022年 作家蔵



ジョルジュ・ビゴ《稲毛海岸》1903年 千葉市美術館蔵

——誰よりも長く展示室の中にいる、監視係が主役の作品です。ある監視係の人は、休日は海を眺めているそうです。誰の意思も欲望も投影されていない風景で目を洗うために。展示室には作者と鑑賞者の記憶と感情が渦巻いています。そのただなかに立つ人は、鉱物めいた気配をたずさえ、静かに意識を張り巡らせています。

日常で表現する

華雪

書家

——十年前、毎日眠る前(それは夜だったり明け方だたりする)に特別に準備することなく手元にある材料で「日」を書く、というルールを決めた。以来、時折中断しながらも「日」を書き重ねてきた。かさ高く積み重なる「日」の束は日々の記録と記憶そのもののように思える。そこに同時代を生きるあなたの日々をぜひ重ねて見てください。

華雪《日 2019.7.23》2019年 作家蔵



山野英之

グラフィックデザイナー

書籍、広告、ブランドデザイン、建築サインなど、平面から空間まで、グラフィックデザインを軸に活動。



Mitosaya 薬草園蒸留所

自社で栽培する果樹や薬草・ハーブ、全国の信頼できるパートナーたちのつくる豊かな恵みを使い、発酵や蒸留という技術を用いてものづくりを行う。



Mitosaya薬草園蒸留所(千葉県夷隅郡大多喜町)

きぐろう 編集室

〈わたしのことを〈わたしたち〉のことへ。毎日のことを、本のかたちで残すプロジェクト。一個人の日記を私家本として編集し、発行している。

井上尚子

現代美術家

——美術館が育む“においの記憶”は、気がつかないところに隠れています。展示作品と人の往来が展示室の匂いを作り、古美術と現代美術の収蔵室の匂いは異なり、収蔵庫に彩りを与えます。そして、今も尚、眠り続けるカタログたちは今夏、偶然の目覚めを迎えます。美術館の匂いに触れ、蘇る自らの記憶を夏休みの作品としてお楽しみください。

文化屋雑貨店

——雑貨屋が美術館にお呼ばれ? これ文化屋大革命ですね。物を追いかけて50年、実は人を追いかけてきました。人にぶつかるとその先に物が出てくる。次から次へと物と人が現れ50年。文化屋雑貨店の本は大書店ではどこの分野に置かれているか分かりません、友人曰く、土農工商文化屋雑貨店!つまり社会の範疇外。



文化屋雑貨店による壁かけ時計 2022年

作品と出会い直す

——本展では最新作や日常生活から自然に生み出されるドローイングなどを出品しますが、その中で最も謎を孕む油彩画はポルティナーリ家のマリアとマルゲリータを描いた4枚の架空の初期ルネサンス風肖像画です。それぞれの人物の中心で画面を切断し再統合することで世界の全てが表現されています。さらに制作中用いた絵具を順番に塗っていった色見本も同時に展示されており、肖像画と同じ成分でできた別の表れも味わえます。

小川信治《ストラスブール》2015年 千葉市美術館蔵

小川信治

画家



目 [mé] 現代アートチーム

——子どものころの夏休み。途方もないくらい退屈に空を眺めていた。空の雲はピタッと止まっていた。日常から抜ける方法を知らずに、事実と空想、その両方の中にいた。あれから随分と時間が経った。雲はかたちを止めることはなく、めくるめく動き続ける存在になった。この夏休み、千葉市美術館に所蔵された目の作品《アクリルガス》にゆっくりと向き合ってみようと思います。

目[mé]《アクリルガス》2018年 千葉市美術館蔵



井口直人×岩沢兄弟

クリエイティブユニット



井口直人《COPY》2021年 さふらん生活園蔵

——コンビニのコピー機を使った井口さんの活動を実際に拝見して、井口さんの日常が街に溶け出し、コンビニ店内に非日常空間が立ち現れたような気がしました。そんな日常のルーチンをちょっとズラすことで見えてくる景色に私たちも興味があります。展示を通じて、そんなズレをみなさんと一緒に体験できればいいなと思っています。

什器製作・空間設計: (new) service [西館朋央+ Rondade]

西館朋央と佐久間磨 (Rondade) を中心に空間設計、什器等の制作を提供するプロジェクト (サービス)。

とある美術館の夏休み
会期 2022年7月16日[土]～9月4日[日]
会場 8・7階 企画展示室
休室日 7月25日[月]、8月1日[月]、15日[月]

詳細はホームページよりご覧ください





2022年4月13日～7月3日 「つくりかけラボ07 植本一子 | あの日のことおぼえてる？」アーティストワークショップレポート

あなたの物語を教えてください。

氏

名

「あの日のことおぼえてる？」のアーティストワークショップとして、作家の植本一子さんと対話をしながらアンケートを記入するプログラムを開催しました。会期中、いつでも参加できるオープンワークショップをアレンジした内容です。今回に限り、プログラム終了後は、記入したアンケートやその場での会話をもとに、植本さんがエッセイを執筆。とても貴重な機会となったワークショップのようすをレポートします。

[開催日：4月24日、5月3日]



植本さんからは、アンケートの回答を深掘りする質問が投げかけられます。寄り添うような問いかけやあいづちに促されて、参加者のみなさんは、ためらいなくするとお話しされていました。



「あの日のことおぼえてる？」ときかれた時に思い出すことはありますか？という質問をきっかけに、参加者のみなさんが思い起こす「あの日」について答えていきます。



撮影ブースで写真を撮り、できあがった写真をアンケートに貼ったり、会場に展示したりします。完成したアンケートは持ち帰り、通常のプログラムはこれで終了なのですが……。

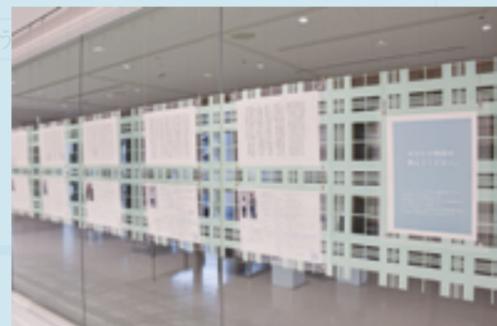
その時あなたは どう思いましたか？

どう感じていましたか？

質問⑥

質問⑦

[撮影：平松市聖、千葉市美術館(右上)]



今回は、植本さんが、参加者のみなさんの「あの日」をエッセイに書き起こしました。聞き書きのかたちで、植本さんの印象や感想もふくめて、ひとつの文章に落とし込まれています。

エッセイの展示は、会期終了まで行います。たくさんの物語があふれるつくりかけラボへ、どうぞお越しください！

つくりかけラボ07

植本一子 | あの日のことおぼえてる？

会 期 2022年4月13日[水]～7月3日[日]

会 場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



次回予告 /



2022年7月13日～10月2日 「つくりかけラボ08 堀 由樹子 | えのぐの森」

「えのぐの森」のイメージを訪ねて～堀さんのアトリエにうかがいました

[撮影：加藤健]



アトリエの壁面に描かれた「えのぐの森」のためのドローイング



虫たちのドローイング

この夏の「つくりかけラボ」には、市内にアトリエを構える画家の堀由樹子さんをお迎えします。「木と木のあいだの隙間を描いている」とご自身がおっしゃるように、堀さんの描く風景には、何かが潜んでいるような、生き物の気配が感じられる不思議な魅力があります。梅雨明けと前後してスタートする「えのぐの森」では、公開制作をされる堀さんと会場を訪れる方々とのやりとりを通して、植物や生き物たちが次々と姿を現し、生命力あふれる夏の森が生い茂ってゆくことになるでしょう。

広報用写真の撮影のため、4月の半ばにアトリエを訪ねました。堀さんは最近、彫塑家のお父様が長い間制作の場とされていたご実家のスペースを、ご自身の制作環境として少しずつ整えられているとのことでした。高い天井からは石膏像を移動させるためのクレーンが吊り下がり、部屋の隅には広い空間を温めるための灯油ストーブが、どっしりと構えています。「彫塑家のアトリエには壁が無いんです。」と、堀さんは言います。平面作品を立てかけておく場所は……？ 室内を見渡すと、壁に沿って造り付けの棚が並んでいます。一方で、作業台と彫塑用の回転台が

置かれている以外は、床面は広く空けられています。

作品の保管場所として増設された中二階の下が片付けられ、板張りの壁に直接、「えのぐの森」のためのドローイングが描かれていました。大きな木が2本、伸びやかに広がる枝の上に黄色や緑色の絵の具が置かれています。壁面の一部には、枝や葉をドローイングやコラージュで描いた白い大きな紙が貼り付けてありました。数日前に送ってくださった写真と比べて木の様子が変わっていることに気づき、堀さんにお聞きしたところ、パーツを組み替えたり、上から紙を重ねて描いたり、またそれを動かしたりして、試行錯誤しながら風景をつくってゆくのだそうです。つくりかけラボの広い空間と白い壁の使いかたを考える過程で、このような手法を取られたとのことでした。

この日は壁のドローイングのほか、ワークショップのアイデアとして、ガラス戸や透明フィルムに描いた虫たちや、『森の部品』の



彩色された画用紙

部品(素材)になる予定の彩色された画用紙(絵の具を水でにじませたり、スポンジなどで模様をつけたもの)も見せていただきました。今回アトリエで拝見したイメージを手がかりに、「えのぐの森」がどのような姿に育ってゆくのか、楽しく想像を膨らませながら、堀さんと準備を進めて行きたいと思います。

[主任学芸員 山根佳奈]

つくりかけラボ08

堀 由樹子 | えのぐの森

会 期 2022年7月13日[水]～10月2日[日]

会 場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



美術館の仕事を紹介します！

その16 展覧会に向けた調査～韓国編～

本連載の初回でも、「作品調査」をテーマに、チェコ訪問についてご紹介しました。今回は、今年の11月から開催する「ブラチスラバ世界絵本原画展—BIBとアジアの絵本、いま(仮称)—」に向けた、韓国での調査をレポートします。

【テキスト：学芸員 庄子真汀】



コロナ禍で、スロバキアでの現地調査が頓挫してしまったなか、新たな取材地としてあがったのが韓国でした。BIBでの韓国の作家の活躍はめざましく、今回の展覧会で紹介する予定のBIB 2021でも、イ・ミョンエさんの *Tomorrow Will Be a Sunny Day* が金のりんご賞を受賞しています。また、絵本やイラストレーション、書店、図書館など、本を取り巻くカルチャーが非常に豊かであるとも聞いていました。怒涛の下準備（商用ビザの手配、PCR検査、ワクチン接種証明書の発行などなど……）をなんとか乗り越え、韓国へ出発！5月中旬、天気の良い時期に、巡回館の学芸員さんと、コーディネーターの方のついでに、韓国各地を調査してまいりました。



坡州出版都市の街並み

坡州出版都市は、国家レベルのプロジェクトによってつくられた都市で、全国の出版社が大集結しています。モダンな建物が立ち並び、そのほとんどが出版社。看板や道も整備されています。感染症の影響で観光客がぐんと減ってしまったそうですが、都市の中心にある本の閲覧施設「知恵の森」は、とても魅力的な施設でした。



知恵の森



田島征三さんの展示



そのほかにも、各地の図書館や美術館、書店をいくつも取材し……。たくさんの方々にご協力いただいたおかげで、じつに実りある調査になりました。聞いていたとおり、韓国の本、とくに絵本文化は、とてもおもしろく、刺激的なものでした。開幕まであまり時間がありませんが、この収穫をぞんぶんに活かせるよう、準備を進めていきます！

国立子ども青少年図書館(江南)



イ・ミョンエさんの展示

ソウルから2時間ほど新幹線に乗ったところにある全州市では、第1回全州国際絵本展が開催されていました。市内の図書館や書店が会場となり、絵本にまつわる展示やイベントを行っています。目玉はイ・ミョンエさんの展示と、田島征三さんの展示。田島さんは韓国でもとても人気があるそうで、海を渡った先で田島さんの原画を楽しむことができ、とても嬉しかったです。絵本展全体とても力が入っていました。



全州市の書店(살익은언어들)



全州市の図書館(인후도서관)



BIB 2021金牌受賞 『おたにまみこ』『たまごのはなし』(2021年刊) 原画 作家蔵

「ブラチスラバ世界絵本原画展—BIBとアジアの絵本、いま(仮称)—」

会期 2022年11月12日[土] - 12月25日[日]
会場 8・7階 企画展示室

スロバキア共和国の首都・ブラチスラバで2年ごとに開催される、世界最大規模の絵本原画コンクール「ブラチスラバ世界絵本原画展(BIB)」。本展覧会では、2021年に開催された第28回展に、日本代表として参加した15名の作家による絵本と原画作品をご紹介します。また、特集展示として、近年の活躍がめざましいアジア諸国とBIBのかかわりを、韓国の絵本や原画作品、資料などを例にご覧いただけます。



「陶器市 2022 @千葉市美術館」を開催しました



5月22日(日)に、「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」展に関連し、1階のさや堂ホールを会場に陶器市を開催しました。京都や栃木(益子町)、千葉などで活躍する作家の方々にご参加いただき、ひさしぶりのマルシェイベントは大盛況で終了! ご参加いただいた作家のみなさま、ご来場いただいたみなさま、どうもありがとうございました。またのイベントの開催を、お楽しみに!

トは大盛況で終了! ご参加いただいた作家のみなさま、ご来場いただいたみなさま、どうもありがとうございました。またのイベントの開催を、お楽しみに!



出展作家 【京都】清水 宏章、キヨロク(六兵衛) 【千葉】エソノコ陶器、外山 慧、千葉陶芸工房(相川くるみ・川崎加奈子・栗須翔子・中田麻未・中塚 剛)、手と具、羽山加奈子【栃木(益子町)】atoadesign、杉本美和子、高内陽彩、南窓薫(石川圭・石川雅一)、ふくしま窯(福島晋平・岡本沙都美) 【BATICA】岡本純一(Awabi ware 代表)、オクウンヒ、小谷田潤、佐藤尚理